

山梨県若手研究者奨励事業 研究成果概要書

所属機関名	都留文科大学教養学部地域社会学科
職名・氏名	准教授・田開 寛太郎 ㊞

1 研究テーマ

地域資源の価値を伝える複合的インタープリテーションの環境教育的効果に関する研究
—西湖・青木ヶ原樹海をフィールドとして—

2 研究の目的

本研究は、オーバーツーリズムへの対応が求められる観光地において、地域資源の意味や価値を深く伝える「複合的インタープリテーション」を開発・実践し、その環境教育的意義と可能性を明らかにすることを目的とする。

具体的には、西湖・青木ヶ原樹海を対象に、自然環境と文化的背景を統合したストーリーテリングに基づくガイドプログラムを構築し、参加者の理解や関心の変容、地域資源の価値認識の深化に着目しながら、その教育的効果を多面的に検討する。

3 研究の方法

(1) 地域資源の調査・分析とストーリーテリングの核の抽出

文献調査および現地踏査、山梨県立富士山世界遺産センター学芸員への聞き取りを通じて、西湖・青木ヶ原樹海における地質・生態系・信仰の関係を整理した。その結果、溶岩地形の形成と植生回復、信仰の展開が時間的・空間的に連関していることを明らかにし、「噴火とその後の復興」を軸とするストーリーテリングの核の抽出を試みた。

(2) ガイドプログラム（複合的インタープリテーション）の試作と実践

抽出したストーリーを基盤に、複合的インタープリテーション・プログラムを設計した。大学の授業・演習科目「フィールドワーク」（前期）において学生がエコツアーを企画し、教育目標設定、ストーリー構築、ルート設計、ガイド内容の具体化を行った。専門家によるファクトチェックやVR教材の活用を取り入れつつ、ワークショップ（2025年12月8日）により構成を再整理し、複数地点を連関的に巡るプログラムへ発展させた。最終的にモニターツアー（2026年2月12日）を実施し、実践的妥当性を検証した。

(3) 効果の評価とモデル化

参加者アンケート、観察記録、レポート等をもとに、理解や関心の変化について質的・量的に分析した。あわせて映像記録を用い、ガイドと参加者の相互作用や環境条件の影響を検討した。ただし本研究では探索的段階にとどまり、厳密な事前・事後調査による学習効果の比較には至っていないため、今後は質問紙やインタビュー、発話データ分析を組み合わせた評価枠組みの構築を課題とする。

4 研究の成果

(1) 授業実践を通じた複合的インタープリテーションの設計

演習科目において学生12名がエコツアーの企画・実践に取り組み、講義と現地調査を通じて地域資源の多面的理解を深めた(図1)。西湖コウモリ穴、青木ヶ原樹海、富士御室浅間神社等での調査をもとに、教育目標の設定、ストーリー構築、ガイド内容の設計を行い、専門家の助言により内容の妥当性を高めた。

その結果、溶岩地形の形成過程、植生の回復、信仰の歴史といった自然と文化の要素を関連づけて理解する複数のテーマが抽出され、個別の資源を超えて関係性の中で地域を捉える視点が形成された。これにより、地域資源を統合的に理解し、それを他者に伝えるために再構成する能力の育成につながり、自然環境と人間活動の関係性を統合的に捉え、その価値を意味づけて他者に伝えるという環境教育的意義の一端が明らかとなった。



図1 学生ガイドの様子(左:富士御室浅間神社、中:西湖コウモリ穴、右:青木ヶ原樹海)

(2) ストーリーテリングの統合とガイドプログラムの高度化

後期には、前期の成果を踏まえ、「噴火と復興」という時間軸を導入してストーリーを再構成し、複数地点を連関的に巡るガイドプログラムへと発展させた(図2)。西湖コウモリ穴、青木ヶ原樹海、北口本宮富士浅間神社、船津胎内樹型を結び、各地点の内容が相互に関連しながら全体として一つの物語を形成する構成を確立した(図3)。

モニターツアーでは、参加者から「場所同士のつながりが理解できた」「自然と歴史の関係が印象に残った」といった反応が見られ、統合的なストーリーテリングが理解の深化に寄与する可能性が示唆された。また、提示順序や対話の取り入れ方、現地環境への配慮がガイドの質に影響することが明らかとなり、実践的設計の重要性が確認された。



図2 ストーリーの再構成ワークショップ



図3 開発したガイドブック(教材)

(3) 参加者の理解・関心の変化に関する探索的分析

本研究では、参加者アンケート、観察記録、レポート分析を通じて、ガイドプログラムがもたらす影響について探索的に検討した(表1)。結果の一部として、青木ヶ原樹海のガイドでは、溶岩地形と植生の関係を時間的変化として捉える説明に対して、参加者の関

心や理解の高まりが確認された。一方で、洞穴内の視認性の制約により、説明内容の理解が十分でない場面も確認され、実施環境が学習効果に影響を及ぼすことが示唆された。

また、レポートには「自然と信仰のつながりへの気づき」や「場所同士の関係性の理解」といった記述が見られ、地域資源を関係性の中で再認識する視点の萌芽が確認された。さらに、学生の学習過程においては、協働的な企画や専門家の関与、VR教材の活用がガイド内容の質向上に寄与していた。

以上より、本研究のインタープリテーションは参加者の理解や関心に一定の影響を与える可能性を示したが、その効果を明確に把握するためには評価方法の精緻化が課題として残された。

表1 エコツアー他者評価シート

Table with columns: 時間, 場所, 項目, 教育内容/注意など, 留意, and a large grid for evaluation (1-5) with a '気づいたこと等' column. Rows include topics like 'ガイド序言', '洞窟の見え方', '洞窟の歴史', '洞窟の形成', '洞窟の生態', '洞窟の地質', '洞窟の文化'.

※2025年10月 日本環境教育学会第36回年次大会(北海道)研究実践報告より

5 今後の展望

本研究では、ストーリーテリングの有効性について一定の知見を得た一方、認知や行動意識の変容に関する検証は探索的段階にとどまった。今後は、事前・事後調査やインタビュー、発話分析を導入し、理解や価値認識の形成過程を体系的に把握する必要がある。また、効果は内容だけでなく、対話や現地環境にも依存するため、これらを含めた総合的評価枠組みの構築を進める。さらに、開発したガイドブック(教材)を基盤に地域実践へ展開し、検証を重ねることで再現可能な教育手法として体系化する。

今後はICTの活用も含め、観光と環境教育を接続する学習モデルの構築を通じて、地域資源の理解促進と持続可能な観光に寄与することを目指す。

6 研究成果の発信方法(予定を含む)

河口湖町等の自治体と連携し、開発したガイドブック(教材)を活用した授業をはじめ、成果共有のワークショップやガイド養成研修を実施する。これらを通じてプログラムの改善と検証を継続し、教育および観光の現場に還元するとともに、学会発表や論文投稿により学術的発信を行う。